

メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ①

## 僕の絵は父に焼かれて天に昇った

■ 実家は木田郡川添村（現高松市）の農家。一つ屋根の下で満

州や東京、高松から疎開したり、

引き揚げてきた親戚らと暮らし

ていた。多い時で20人以上はい

ただろうか。20人といっても、

男は兵隊に取られていてから、

家にいるのは女性、子ども、年

寄り。当時はどこの家も似たり

寄ったりの大家族。食べ物や日

用品のほとんどが配給制だった

から、20人が暮らしていくのは

大変だったに違いない。ただ、

食うには困らなかった。

■ 当時は「産めよ増やせよ」が

国是だった。わが家も長男の僕

を筆頭に男3人、女4人の7人

きようだい。僕は跡取り息子と

して育てられた。きようだいの

中で一人だけ、絵を習わせても

らったこともある。近所のおじ

さんに描いた絵を見てもらっ

けだったけれど、大人に褒めら

れるとうれしかった。

■

■ 子どもの世界では、足の速い

子が女の子にもてる。その次に

もてるのは、絵がうまい子。身

近にある草花なんかを女の子に

描いてあげると「たけっちゃん、

もっと描いて」となる。

■ あんまりうまいものだから、

作品はいつも小学校の渡り廊下

に掲示された。習字もうまかつ

たから廊下行き。絵も習字も、す

べてを先生が張り出してください

■ った。絵は女の子だけでなく、大

人をも喜ばせるんだと知った。

■ ある年の暮れ、担任の先生か

ら連絡帳をもらった。今で言う

と通信簿。そこに書かれていた

一文に、頭をなぐられたような

衝撃を受けた。僕の絵を大いに

褒めてくださったはずの担任の

先生が「絵を描くようにもっと

勉強をしてくれと、成績が良

くなるのですがと書いていた。

■ 当時、学校の先生は神様のよ

うな存在。その「先生様」の言

葉は絶対だ。父、恒一は絵を描

■ かせてくれなくなった。僕は隠

れて描くようになった。見つか

ると怒られるから、曾祖父の部

屋に絵を隠した。

■

■ この頃はどの家もまき風呂。

まき風呂は大変だから、隣近所

が交代で風呂を沸かした。わが

家が当番のある日、風呂場から

近所の人の声が聞こえてきた。

■ 「今日の風呂はとて面白いね

え。よくあったまる」「そうだ

ろ。猛の絵でたいた風呂やけ

■ ん」と父。

■ そういうわけでこの頃の絵は

一枚もない。女の子や大人たち

を喜ばせた僕の絵は、風呂のた

き付けになって天に昇ってしま

ったのだ。

◇ (現代美術家)

◇ 川島 猛(かわしま・たけし)

1943年高松工業学校(現高松工

芸高)航空機科入学、49年同機械科

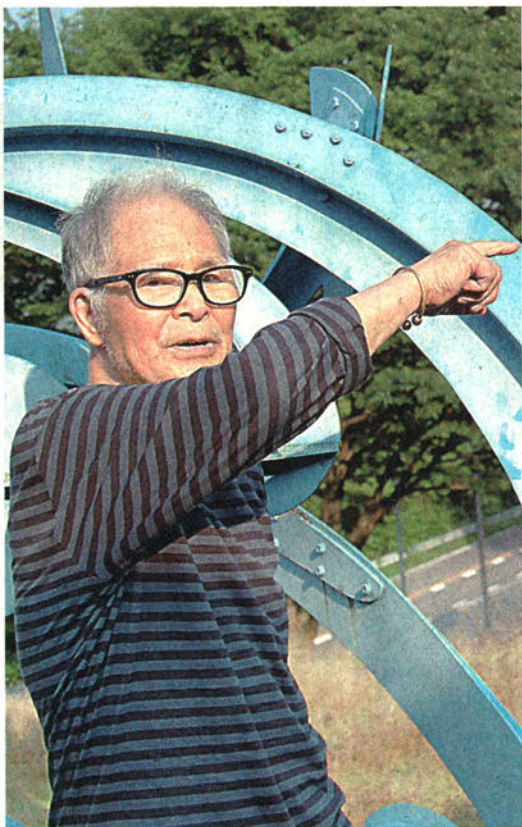
卒。武蔵野美術専門学校(現武蔵野

美術大)を中退し、63年渡米。日米

で個展を開く。2016年帰郷。四

国新聞文化賞、県文化功労者など。

経済 KAGAWA



大人たち

僕は絵を描くことが大好きだ。生活より芸術優先が持論。戦後の東京で、米ニューヨークで、僕は夢を食って生きてきた。食える夢を見るには少女のこつがいろいろ。どうやらそのこつを子どもの頃につかんだようだ。



メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ②

## 闘いの気分抜けず東京行き決行

1943年、父の強い希望で、新設された県立高松工業学校（現高松工芸高）の航空機科に入学。今思えば、飛行機的设计家なら、戦争に行かなくてもいいだろうという親心だったのだろう。「親の心子知らず」だが、僕は絵の勉強をしたかった。

学校では運動場を耕してイモを植え、農村にかり出されると、土地改良や草刈り、稲刈り、麦刈りを手伝った。授業料を払っているのに、学徒動員、勤労奉仕。たまの授業では定規やコンパス、デバイダーを使って作図のまね事。先生も女先生しかないし、航空機科には、絵が好きな同級生もいなかった。

高松空襲を何とか生き延びた頃に突然、終戦。玉音放送をど

こで聞いたのか、記憶がない。ただ、殴られたような衝撃を受けたことをはつきり覚えてい

た。油絵を始めたのはこの頃だ。正直に描こうとして、屋根瓦や木の小枝の数を数え、そのまま写し取ろうとして実際の景色とは似ても似つかぬ絵になり、どうすれば実体に近づけるかと独り思案にくれる毎日だった。

終戦により、航空機科は廃止され機械科になった。戦中の混乱もあり、入学してから6年後の49年に僕は工業学校を卒業し

た。家出の資金稼ぎのため、映



一緒に上京した北山泰斗君(左)と

画の看板書き、写真館の助手、電線工場の職工などいろんなことをした。

売るための絵なら、すらすら描けた。一番多く描いたのは瀬戸内海。屋島や五剣山も描いた。香川の名勝は目をつぶっても描けた。そんな絵を工業学校の先輩らに買ってもらった。「おまえの絵で倉庫がいっぱいだ」と言われたほど。ありがたい先輩たちだ。

絵を売った少しのお金と失業保険証を懐に家出数回。父に見つかると、「こら猛、何しよんや」と連れ戻された。行きつ戻りつを繰り返して、今度は父親に見つかからないように、友人の家へ少しづつふとんなど家財道具を運び出し、父のいない昼間に決行した。町外れまでやってきて成功を確信したが、向こうに人影。父親だ。

(現代美術家)

終戦

経済 KAGAWA



メッセージ

# Message

## 香川のリーダーたち

### 川島 猛 ③

# 画家としての道が開けてきた

しい人の波で、変化とスピードの渦中にあった。東京生活は10年余。米を食わず、毎日夢ばかりを食っていた。

新聞販売所で住み込みの仕事が見つかり、朝は新聞配達。絵を描きたくて家を出て、上京したくらいだから、描くことに燃えていた。人を描くのが大好きだったから、友人とモデルになり合ったりした。後に高松工芸高の校長になった小倉右一郎先生（故人）が東京のアトリエを開放してくれて、絵を志す具出身の若者と下宿。そこでもデッサンの毎を送った。

資金をためて54年、武蔵野美術専門学校（現武蔵野美大）油絵科に入学した。毎日絵を描けるのはいいんだけど、リングやつぼのデッサンばかり。つまらなくて2年ほどで辞めた。

1951年、21歳の時、北山泰斗君（画家、故人）と連れ立って家出して上京した。後から安本一夫君（漆芸家、故人）もやって来た。国民が自由に住めるようになった東京は目まぐる

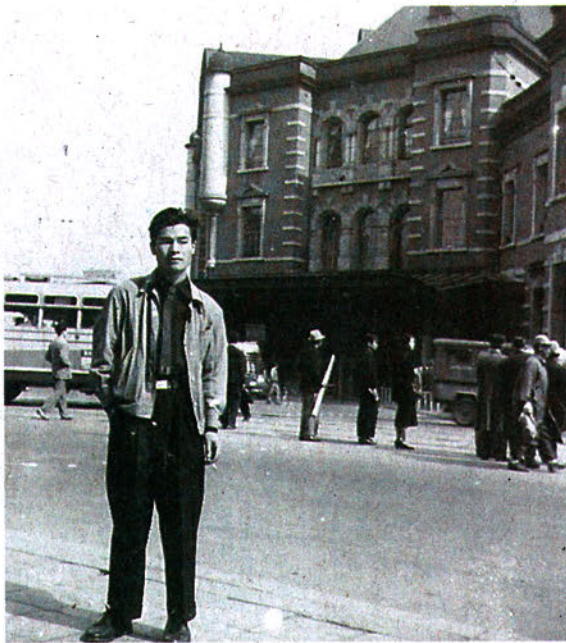
東京10年

東京で開かれた具人会で宴会上座にいた猪熊弦一郎先生を見つけてあいさつに。僕にとつて猪熊先生はあこがれのスターだ。自己紹介もそこそこに、猪熊先生が膝元に置いていたピースの丸缶を見つけ、「先生、ピースを1本いただけませんか」と緊張のあまりに失言してしまった。失言がきっかけで先生は僕を覚えてくださり、東京の自宅兼アトリエに招いてくれた。

先生は親しみを込めて「猛君」と呼んでくれた。電話などもないから、突然お邪魔するのだけれど、先生は嫌な顔一つせずに、「おい、猛君が来たぞ。飯を持ってきて」僕もわざと昼食時を狙って「先生、絵を見てください」先生は終生優しかった。

先生は親しみを込めて「猛君」と呼んでくれた。電話などもないから、突然お邪魔するのだけれど、先生は嫌な顔一つせずに、「おい、猛君が来たぞ。飯を持ってきて」僕もわざと昼食時を狙って「先生、絵を見てください」先生は終生優しかった。

大学を辞めた56年、人体専門の代々木絵画研究所に入所した。研究生兼



上京間もない頃の川島氏。東京駅で

た。研究生兼用務員として入らないかという話に飛びついた。用務員の仕事に加え、モデル集めも僕の仕事だった。初めは無給。みんながデッサンの消しゴムに使ったコップを昼飯に、夕飯は閉店前で半額になったラーメンを食った。半年で栄養失調になったけれど、毎日、裸婦を描けたから何ともない。この頃、人体を象徴的に表現した抽象絵画をアンデパンダン展などに出版。高松三越や東京・銀座の画廊で個展を開いたのもこの頃だ。59年には父が三鷹台（現東京都三鷹市）に土地を買ってくれた。30歳近い長男が家の一つもなく、東京で絵を描いていることがよほど恥ずかしかったのだらう。僕はこうして東京でアトリエを構え、結婚もした。

画家としての道が開けてきたように思ったが、どこかチマチマ、セコセコ。評価される絵を描いたところで、カーボンコピー。このままでいいのか。僕は何のために生まれてきたのだらう。最高の親不孝をした自分を納得させる答え探しが始まった。

（現代美術家）

経済 KAGAWA



メッセージ

# Message

## 香川のリーダーたち

### 川島 猛 ④

# 開放感から深呼吸一つ。描けるぞ

流派のないところでもっと描きたい。描かなければならないと思った。

戦前まで世界のアートの中心はフランスのパリ。戦後は米ニューヨークに欧州からアティエ・ストが移住し始めた。マルセル・デュシャン、マン・レイ、デ・クーニングらが第1陣だったか。ジャスパー・ジョーンズやジャクソン・ポロックもいた。あこがれの郷土の先輩、猪熊弦一郎先生もパリに向かう途中でNYに立ち寄り、アトリエを構えていた。先生がいるという精神的な支えもあって、1960年ごろに渡米を決意した。

僕の肌に合ったのだろう。不安や心配は吹っ飛んで、代わりに今までの自身の呪縛から逃れた開放感を味わった。大きく一つ、深呼吸をした。描けるぞ。朝も昼も夜も、ぶっ通しで描いた。血液が体中をドクドクと流れるのを感じた。

渡米間もないある日、僕はNY市から呼び出しを受けた。「ミスターカワシマ、あなたは隣人から、騒音と臭いで訴えられています。今後はそのようなことをしないと宣誓書にサインをしなければなりません」と。その日の朝も、いつもと変わることもなく隣人とあいさつしたばかりなのに。絵の具の臭いや、キャンバスを張る音が気障りだという。NYの住人はこれはこれ、それはそれとあくまでもドライに考えるのだ。そつでなくてはNYでは生きられない。

1、2、3カ月が過ぎた頃、もう一つ、日本ではあり得ないことがあった。展覧会を一度もしていない無名の日本人の僕の作品を買いに来た人がいたのだ。ラリー・オールドリッチ現代美術館のミスターオールドリッチ、そして数カ月後には、クライスラー美術館のミスタークライスラーがアパートを訪ねてきた。2人は長い時間をかけて作品を見続け、僕の新作数点を買った。「あなたの大切な作品を譲ってくれてありがとう」。これが日本だとうちはいらない。作品を買ってもらうには頭をぺこぺこ、おべんちゃらの一つも必要で、お礼を言うのは僕たち。

日米は真逆だ。食うためのアルバイトもした。長く続いたのは米国人画家ポール・ジェンキンスさんのアシスタント。僕は手先が器用だから、キャンバス張りや下地塗りなどをまかされた。下地塗りをしていたら、世界的な大家のデ・クーニングさんがやって来た。あいさつをしたかったけれど、若造のアルバイトの身。うつむいて仕事をしていたら、「やあ」と手を差し伸べてくれた。NYの洗礼をたくさん受けて、僕は米国定住を決めた。

(現代美術家)

## 渡米

東京生活は10年余り続き、ようやく画家としての道筋が見えてきた。その道は親不孝をしてまでの道だったのかと自問しつつ、画布に向かった。しがらみや年功序列の人間関係、会派や

63年10月10日、妻と2人で渡米。街の真ん中に住んでやろうと地図を広げ、マンハッタンのど真ん中、セントラルパーク近くのアパートを借りた。NYは

一つ、日本ではあり得ないこと



渡米時のパスポートに伸った写真

# 経済KAGAWA



メッセージ

# Message

## 香川のリーダーたち

### 川島 猛 ⑤

# NYは日本人の若造を受け入れた

米国で開いた最初の個展のオープニング



けてニューヨーク近代美術館（MOMA）で開かれた「新しい日本の絵画と彫刻」展で、会場の入り口の真ん中に展示されたのが僕の大作「Red and Black（レッド・アンド・ブラック）」だった。

2層×3層のキャンバスを格子状に仕切り、一つ一つの枠の中に、それぞれ異なるフォルムを朱と黒で描いた作品だ。西洋人がこれまで見たこともないものを見せたいと考えた。思いもよらない色使いも心掛けた。色使いの根底には讃岐漆芸の影響があったかもしれない。

その絵はMOMAのパーマネントコレクション（永久展示品）に選ばれ、僕の名はNYのアーティストで知られるようになった。MOMAが開いた日本の現代美術を取り上げた展覧会は当時、これ一回きりだった。

### 米で個展

偶然にも恵まれた。1963年の米ニューヨーク到着後すぐに描いた作品はそれぞれ、カナダや米ロサンゼルスのある有名コレクターのコレクションになった。2年後の65年から翌66年にか

NYは世界中の人種が集まって真剣勝負をする闘いの場。功成り名遂げるには、10年はかかる覚悟をしていたが、NYは来たばかりのジャパニーズのヤングに親しみと明るさで接し、受け入れてくれた。

MOMAのコレクションに選ばれたことがきっかけとなり、67年に37歳で57丁目の老舗、ワールド画廊で個展の開催が決まった。当時NYには貸し画廊がなかったから、個展を開くのもステータス。開催を猪熊先生に報告したことを覚えて

いる。先生はもちろん大喜びで、「おい、猛君が来たぞ。ご飯持ってきて」。先生の奥さん手作りのご飯はいつも、本当においしかった。

70年にはアメリカ永住権を得た。その後で申請をすれば市民権を得られるのだけれど、市民権を取得すると日本国籍を失ってしまう。つまり、米国籍になる。僕は日本人だから、市民権はもらわなかった。

翌71年、高松市の県文化会館で個展を開いた。初めて郷土で開いた大規模展だ。絵画から近

作の立体造形まで95点を展示。会期は2週間だったけれど、高松工芸高生ら1591人が来場した。会期中に同校から講演会をやってくれないかと頼まれたこともあった。

「8年ぶり帰国 生命の躍動」などの見出しが新聞に躍ったが、故郷に錦を飾ったとはつゆほども思えなかった。僕の家出を無言で送り出した父が展覧会に来なかったからだ。

父が来なかったことで僕はますます奮起した。米国に帰国後は目が覚めると描き、絵の前で寝た。

このころ、東京の画廊で僕の展覧会を企画してくれた順子さんに出会い、2度目の結婚をした。画家仲間から「若い人と結婚したから絵がカラフルになった」と冷やかされた。「カラリスト」(色彩のスペシャリスト)と呼ばれたこともあったほどだ。(現代美術家)

## 経済KAGAWA



メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ⑥

## 場所や友人の刺激受け挑戦の連続

は大きな作品を作るのに適しているし、何より家賃が安いこともあって、多くのアーティストが住み始めていた。

ひと口にアーティストと言っても、人種や国籍、宗教、プロとアマ、リッチからブアまでさまざま。ソーホーでは隣にどんな人が住んでいるのか、何が起きるのか分からない。そんなカオス(混沌)とテンション(緊張)に魅せられて、帰国を決めるまでの45年間、僕はソーホーで暮らした。

1970年ごろ、米ニューヨークのダウンタウンにあるソーホー地区に引っ越した。今でこそソーホーはハイソサエティな世界の文化の中心地になったが、当時は人通りも少なく、ひっそりした倉庫街だった。倉庫

ソーホー

だった。

警察沙汰も多かったが、見かねたNY市がアーティストに限りて居住を認めたことから、僕もおおっぴらに住み始めた。やがて周辺にはアーティストに合わせたようなユニークな店、画廊などが次々にオープン。プロから自称アーティストまで、人も随分増えてきた。

人が集まるとパーティーを開くのが米国流。それも自宅に招くのが礼儀だ。僕たち夫婦が住んだロフト(倉庫)は70坪ほどの広さがあり、交通の便も良かった。僕たちは、誰が来てもいい「オープンパーティー」や、夕食後に開く「アフターディナーパーティー」をした。1週間に1度、パーティーを開くこともあった。

パーティー会場はソーホーの縮図のように混沌として面白かった。彫刻家と評論家、画家とダンサー、コレクターと女優など、組み合わせはまちまち。話

題も作家論から芝居やロック音楽、次の市長候補、スキヤンダルまで止めどなく広く、水割りやワインで夜が白むまで楽しんだ。

友人が増え、仕事場が広くなると、立体造形なども手掛けるようになった。絵のサイズも大きくなり、鉄や木など、扱う素材も増えた。変化はチャンス。僕は身の回りの変化と無関係にしていることはできない。

変遷を大きく分けると三つ。NYに渡った60年代はレッド・アンド・ブラック・シリーズ、

次に取り組んだブルー・アンド・ホワイト・シリーズ(70〜90年代)、その次が「今生の楽園」をテーマにしたドリームランド・シリーズ(90〜2001年)

だ。形にこだわったり、色にこだわったり、色のハーモニーにこだわったり…。山の頂上に登ると、別の山の頂上が見えるように、チャレンジしなければ次はない。イメージに追っかけられていくような毎日。「描く」というより、何者かに「描かされていく」といった方がその感覚に近いかもしれない。

(現代美術家)



米ソーホー地区のアトリエで妻と(photo by HITOSHI YONEYAMA)

経済 K A G A W A



メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ⑦

来る者は拒まず、去る者は追わず

好家や僕のファン、香川県人などなど。実に多彩だった。

その頃から僕は1年を10カ月と計算して仕事のスケジュールを組むようになった。2カ月を来客の付き合いに費やしたいからだ。

僕は人が大好き。来る者は決して拒まない。

1970年から住み始めた米ニューヨーク(NY)のソーホー地区のアトリエには、多くの来訪があった。NY在住の日本人、外国人アーティストら美術関係者に加え、日本人サラリーマンの駐在員、旅行中の美術愛

千客万来

74年に僕のアトリエから歩いて15分ほどのところに世界貿易センター(WTC)が完成すると、NYは名実ともに政治、経済の中心になったかのようだった。世界的企業のNY支店も次々に開設。街はホットドッグを手にしたエリートサラリーマンであふれかえった。そんなエリートのうち、日本人サラリーマンが僕のパーティーにもやって来るようになった。聞けば「NYではあいさつ代わりにアート

の話をする。日本ではゴルフの話しかなかったから困っていた。先生にアートを教えてもらいたい」という。そんな商社マンや銀行マンが来るようになる

と、人の輪が広がり、米在住の香川県人との交流も始まった。90年ごろだったか、脇信男高松市長(当時、故人)の歓迎会をアトリエで開いたのがきっかけになり、後にNY香川県人会の会場が僕のアトリエになった。県人会は年に1度で、在NYの県人30〜40人ほどが集まった。パーティーが楽しみでワシントンから飛行機で駆け付ける人もいたほどだ。以降、僕が帰国した2016年まで県人会の会場は毎年、僕のアトリエだった。県人会だけでなく、出張で米国に来た県市町議や経済人も立ち寄ってくれた。

NYクイーンズ区にオープンしたノグチ美術館の開館セレモニーの時にはイサム・ノグチ先生や山本忠司さん(共に故人)、

和泉正敏さんらもアトリエに来てくださった。

中でも頻繁に交流があったのは日本人アーティストで、当時ソーホーに住んでいた河原温さん、池田満寿夫さん(共に故人)だった。アートの話はしなかったけれど、互いに刺激し合っていた。



アトリエを訪れたイサム・ノグチ先生(左)と山本忠司さん(中央)に自作を説明した

いたように思う。満寿夫さんは僕の「心友」だ。77年に芥川賞を受賞された折には祝賀パーティーをアトリエで開いた。当時の満寿夫さんは「売れっ子」で、雑誌などの原稿依頼や、マスコミからの出演依頼が相次ぎ、とても忙しそうだった。それでも誘えばいつでも来てくれた。

「忙しくないの?」と聞けば、「時間はつくるもんだよ」と言っていた。マージャン大会に奥さん連れで現れ、代わりばんこに卓に付き、合間に仕事をすることもあった。忙しいと思った時にはそんな満寿夫さんの姿を思い出す。そうすれば、忙しいなんて気持ちは吹っ飛ぶ。

人生は全てイエス、イエス、イエス。ノーって言うてる暇はない。(現代美術家)

経済 KAGAWA



メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ⑧

## 再び戦争。焼け野原はもうたくさんだ

るような日常だった。

危なっかしいけれど、愛すべき日常は2001年9月11日、テロリストによって壊された。僕は生涯で2度目の戦争に遭った。

その日、NYソーホーのアトリエで友人と朝まで飲んでいたら。夫婦で床にいたのは午前7時くらいだったか。9時すぎに妻に揺り起こされた。「ねえ起きて。大変なことになってるわよ」と妻はテレビを指さした。

居住ビルの火災、洪水、殺人、事故死、自殺、盗難未遂、レイプ、夜逃げ、強制送還……。全てニューヨーク（NY）生活で僕の身の回りで起きた出来事だ。僕自身もけが、入院、手術などを経験した。まるでハイウエーを猛スピードでぶっ飛ばしている

9・11

た。

受話器の向こうで「川島さんは大丈夫？」と。アトリエはWTCから歩いて10分ほどの場所にある。友人たちが心配するのも無理はないと思うと、背中を冷たい汗が伝った。

妻が外に行ってみようと言う。僕はこれっぽっちも見たく



世界貿易センタービルのエントランスで開かれた「ウインドー・オン・ザ・イースト」展の会場

なかった。子どものように駄々をこねたようにも思う。本当に見たくなかったのだ。もう、焼け野原はたくさんだ。

数分後に妻が涙顔で帰ってきた。WTCの方向は空一面、どうす黒くて何も見えないという。消防車やパトカー、救急車がサイレンを鳴らしながら、ひっきりなしに通る。至るところで道は封鎖され、身分証明書を持っていないと自宅にすら入れないようだ。ああ、これは戦争だと思った。

■ WTCは日系米国人の建築家、ミスター・ミナル・ヤマサキ(故人)の設計によることや、オープン間もないころにエントランスでグループ展を開いたこと、ビル内の日本企業のオフィスに僕の絵があったことを思った。NYに来た友人知人をまず案内する場所で、大好きな

散歩コースだった。僕は体の一部を失ったかのようだった。

夫婦で毎日、アトリエの階段に座って過ごした。翌02年7月から、香川の県文化会館で2度目の回顧展を開くことが決まっていた。そこで新作を並べたかったけれど、作品ができない。でも、何かをやっていないといいたまわず、アトリエにあった木材でやたらと本棚を作った。

■ 半年後のある日、僕は再び絵筆を取った。描くことにしか逃げ道はない。そう思うと筆は止まらなくなった。かつてのアシスタントに来てもらって、一気に40点以上を描き上げ、展覧会で発表した。そのシリーズの一つが今も取り組む「万華シリーズ」となった。

「万華」とは、万物万事は変化するとの意。何一つ、ひと所にとどまるものはない。世界は諸行無常なのだ。そんな中でも、僕はもがきたいと思う。

(現代美術家)



メッセージ

# Message

香川のリーダーたち

川島 猛 ⑨

## 芸術祭参加で「瀬戸内海愛」深まった

然そのものにテンションがある。

僕はこれまでアメリカ大陸にある国々や、アジア諸国を訪問したが、これほどバランスのいいテンションには巡り合ったことがない。世界に誇るべき郷土の宝だ。

数年前に瀬戸内海の島を舞台にしたアートの祭典を開く予定があると関係者から聞き、全面的に協力することを伝えた。瀬戸内の活性化になることなら何でもする。

外国の友人、知人を案内するときは、栗林公園と瀬戸内海がお薦めだ。いずれも美しく、強いテンション（緊張）に満ちている。栗林公園には人がつくれたテンション、瀬戸内海には自

瀬戸芸

第1回の瀬戸内国際芸術祭は2010年であった。僕は島民やボランティアらと立ち上げたグループ「川島猛とドリムフレンズ」として参加。男木島の空き家に作品を展開することになり、米ニューヨーク(NY)生活で作ったため「想い出玉」

の展示を決めた。

想い出玉はライブドキュメント、つまり日記だ。僕が手にした古新聞、手紙などの紙類を集め、キャベツのように巻いて貼り重ねた作品。直径1メートルを超える大きなものから、片手に乗る



第1回の瀬戸内国際芸術祭で、制作を手伝ってくれたメンバーたち

ほどの小さいものまでがある。紙には米中枢同時テロを報じた新聞や、ケネディー暗殺を特集した雑誌など、貴重な印刷物も交じっている。僕に届いたラブレターもある。ここ30年ほどで作った想い出玉は段ボール数十箱分。ほとんどをアメリカから男木島に送った。

空き家を掃除した時に見つけた手紙や帳簿類なども想い出玉にして展示したところ、家屋の持ち主の方が喜んでくださったこともあった。子どもたちと想い出玉を作るワークショップやカフェなども人気で、古里の香川を考えるきっかけになった。

それから3年後に開かれた第2回の芸術祭にも喜んで参加した。会場は初回と同じ家屋を使わせてもらった。タイトルは「タイム・チューブ とき まき つつの家」。このときはNY生活で集めた雑誌やポスターを主に使った。紙に書かれたドキュ

メント(文章)をよく見てもうため、形状を玉から筒に変更。万華鏡のように記録をのぞいてもらう趣向だ。屋外ではドリムフレンズ手作りの「巨大万華鏡」も設置。一風変わった男木の風景を楽しめる工夫も凝らした。

この頃ようやく島民の方に顔を覚えてもらい、島を歩くと声を掛けられるようになった。「先生、お帰り」「ただいま、お元氣そうですね」。いわば「ご近所付き合い」が始まったのはとてもうれしかった。

そう言えば、英語には「お帰り」「ただいま」に相当する言葉がない。まして、ご近所と交わす「お帰り」「ただいま」に当たる表現などもない。芸術祭は僕に瀬戸内海の美しさや、人々の穏やかな暮らしぶりを思い出させてくれた。それを「瀬戸内海愛」と言ってもいいと考えている。

(現代美術家)

経済 KAGAWA



メッセージ

# Message

## 香川のリーダーたち

### 川島 猛 ⑩

# 香川、東京、ニューヨーク、香川

京、東京から米ニューヨーク(NY)へと自分をチャレンジさせてきた。

チャレンジの場は人間が集まるキャピタルシティ(首都)でなくてはならなかった。グローバルな活動や、インターナショナルに通用する作品作りには刺激が必要だ。都会のカオスとテンションの中で闘うことが三度の飯より大切だった。

2010年に開かれた瀬戸内国際芸術祭への参加を機に、瀬戸内海を見ながら新しいステージに挑戦したいと思い始めた。地位や名声を得たい、女性にもてたいといった若い頃の欲も、年を重ね程よく抜けてもいたのだ。

その頃から僕は帰国を真剣に考え始めた。折よく、小型精密モーター製造のオリエンタルモ

ーター(東京)から高松亀水事業所を文化施設に利用してほしいとの打診が県にあったそう。同所を制作拠点として使わせていただくことになり、僕は米国を離れることを決意した。

16年2月、渡米から半世紀を経て妻と帰郷した。NY生まれ

の娘は、主人や子どもと共にそのまま米国にステイした。半世紀分の荷物は段ボール2043個にもなった。多くが作品で日用品はほとんどない。師と仰ぐ猪熊弦一郎先生が「猛君はよく仕事をしている」と褒めてくださったことが昨日のことのようによみがえる。

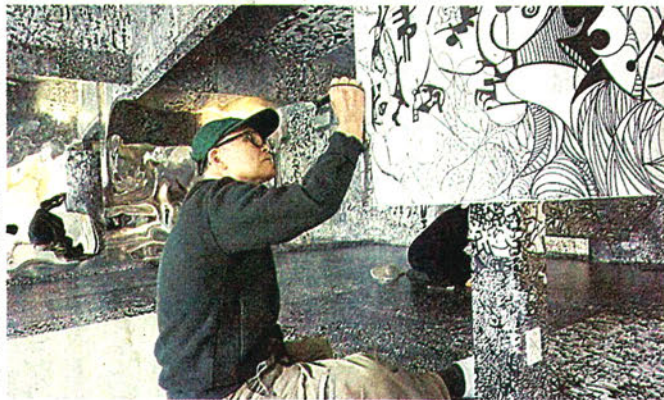
若い頃は行き先が決まっていなくても、帆を上げて出航することができた。答えが分からなくてもすぐ行動。失敗すれば「しまった。ごめんなさい」と言えば良かったのだ。

僕は例えば明日亡くなっても、「川島さんは長生きしたね」と言われる年齢になった。生物学的な死が近づくともう失敗は許されないのだ。「しまった。ごめんなさい」は通用しない。誰かに、もしくは自分自身に、「跡も取らず家出をして、親不孝もんが」とののしられても反論の一つもできないうちは死んでも死にきれない。

そういう意味でこれからの航海はともシリアスだ。目的はただ一つ、「ホワイボン(W hy you were born?」なぜ自分は生まれたか)」の答え探し。自分自身への問いだから、答えは自分の中にある。僕はアーティストだから制作し続けることでしか、その答えは見つからないように思う。のんびりしている時間はない。

人生は選択の連続だが、生まれてきたこと、死ぬことはノーチョイス。いつ、どこで、誰のところに生まれようかなんて誰も選べない。死ぬことも同じ。いつ、どこで、死のうかなんてとても思い通りになるものではない。でも僕は最期まで真剣に生きるというチョイスをした。

今年の瀬戸内国際芸術祭参加作品の制作にも取り組んだ



ステージ

経済 KAGAWA

● 次回は21日付からボワ・エデュボンオーナーシェフの木場巳雄氏 (現代美術家)